



お茶大子ども学
ブックレット

Vol.2

第2回
お茶大 *ECCELL* 子ども学シンポジウム
2011.11.19

今、子どもが育つ環境を考えるI

～「ナー ज्याの村」本橋監督をお迎えして～

<講演>

本橋 成一氏

いのちはみんなつながっている ～知識より知恵を～

<ミニセッション>

小玉 亮子氏 ・ 榊原 洋一氏



「お茶大子ども学ブックレット」について

このブックレットは、お茶の水女子大学ECCELLプロジェクト（国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning）が発行するものです。本事業は、学生と社会人がともに子ども学すること、子ども学を生涯学び直すことをとおして、大人が成長していく場を創造することをめざしています。ECCELLで企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共有するために、ブックレットの形で発行し、学びの輪を広げたいと考えます。

* 『お茶大子ども学ブックレット』は株式会社ベネッセコーポレーション寄付金により作成されました。

目次

開会挨拶 および 講演者紹介 5

〔講演〕

本橋 成一氏 9

〈ミニセッション〉

小玉 亮子氏 27

榊原 洋一氏 37

質疑応答 45

第2回 お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム

テーマ：「今、子どもが育つ環境を考える」 ～ 『ナージャの村』本橋監督をお迎えして～

日 時：平成23年11月19日（土）13:30～17:00

会 場：共通講義棟3号館105室

総合司会：菊地 知子（お茶の水女子大学 ECCELL 講師）

登壇者および演題

本橋 成一氏（写真家、映画監督）

「いのちはみんなつながっている」 ～ 知識より知恵を～」

小玉 亮子氏（お茶の水女子大学 教授）

『子どもたちと未来』を再考する —— 本橋さんのご講演をお聞きして——

榊原 洋一氏（お茶の水女子大学 教授）

「東日本大震災後の子育て環境について考える」

【開会挨拶 および 講演者紹介】

菊地 それでは、第2回 ECCELL子ども学シンポジウム「今、子どもが育つ環境を考えるI」を始めたいと思います。みなさま、お足元の悪い中お集まりくださいましてありがとうございます。最初に、ECCELLリーダーの浜口順子からひと言ご挨拶をさせていただきます。

浜口 みなさま、こんにちは。本学で教員をしております浜口と申します。本日はようこそお越しくくださいました。ECCELL（エクセル）とは、ECCEが Early Childhood Care and Education ≡ 幼児教育、ILが Lifelong Learning ≡ 生涯学習ということで、乳幼児教育についてを0歳から生涯にわたって一緒に考え合っていくことを目指しているプロジェクトです。昨年2010年度から立ちあがっております。今年2年目を迎えました。保育や子ども学を専門としている本学教員、附属幼稚園の先生方、それから学内にございます0歳から2歳児を対象とした附属のいずみナーサリーの先生方が一緒になって、大学の授業を行ったり、社会人を対象とした夜間の授業を開講したりしております。また、このようにシンポジウムやフォーラムを開くことで、共に考え合っていく機会をつくっていききたいと思っております。

ECCELL子ども学シンポジウムは今回が第2回となりますが、第1回は今年の3月13日、つまり震災から2日後に「子育て力の危機と創生」というテーマで開催しました。このテーマを企画した段階ではもちろんまだ震災が起こっていませんでした。しかし、地震発生後は東京でも余震が続いていました

し、交通機関も間引き運転や夜間は不通などで、開催できるのかどうか不安な状態でした。さらには、原発事故について日本がそして世界が知るといふ大変な翌12日を経て、13日のシンポジウム当日を迎えました。もう2、3日遅れていたら中止になっていたと思うのですが、本当に混乱の中でドタバタと開いてしまいました。しかし、そのような中にもかかわらず30人近くの方がお見えになりました。そのときの雰囲気はスタッフは皆よく覚えておりますが、家でじっとしてられない、交通機関はこのような状況であるし、余震もいつ起こるか分からないという状態がしばらく続くのだろうけれど、今こそ子どもたちのことをちゃんと考えておきたいという熱気があふれる、そういう会だったことを思い出します。これまでも、もちろん子どもたちの将来を考え、保育を考えてきたつもりではありましたが、もう一度、自分たちがどう生きるかをもっと真剣に考え、子どもの保育のことを真剣になつて考え直すという出発点に立ち戻されたというのが、震災後2日目、加えて原発事故というものを迎えて開催した初年度の第1回のシンポジウムでした。第2回となります今回は、チェルノブイリ原発事故後の村の様子を映画になさった本橋成一さんにお話をうかがいながら、今の日本の子育ての状況を考えるヒントをいただきましたと思っております。

これからも私たちECCELLの活動を見守っていただき、このように参加していただければ大変ありがたく存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

菊地 浜口先生ありがとうございました。

本日は、シンポジウムタイトルにもございますように、写真家の本橋成一さんにお越しいただきまし

た。すでにご覧いただいた方も多くいらっしやるかと思いますが、チェルノブイリ原発事故のときにベラルーシという国の中で被爆した村の映画『ナージヤの村』や『アレクセイと泉』というとても素敵なお話を撮られた監督さんでもあります。

実は、先ほど挨拶しました浜口先生が、今回の福島事故の後に開かれました小さな研究会で「なんだか子どもたちと若者にすまないなと思う」と口にしたのです。そのことばを耳にした私は、前に観ていたこれらの映画のことが思い出されました。映画の中には人間だけではなく、動物や草木や生き物もたくさん出てきます。地球の仲間のほんの一握りの人間がしかしたことなのに、お金で得をするとか、便利になるとか、快適さを得るということからはわりと縁遠い生き物たちや若者、子どもたちに対して本当にすまないことをしてしまったなという気持ちがありました。私たちは「子ども学」として考えていく上で、ぜひ本橋さんのお話を聞かせていただきたいと思ってお招きしました。それでは、お話を始めていただきましょう。本橋さん、どうぞよろしくお願いいたします。

〈講演〉

【本橋 成一氏】

いのちはみんなつながっている
く知識より知恵をく

こんにちは。果たして「今、子どもが育つ環境を考える」というメインテーマに合う話かどうか、内容はかなり脱線するのではないかと思つていますが、お許しください。

今日まずお話ししようと思つるのは、1986年に起こつたチエルノブイリ事故のことです。ぼくが最初にチエルノブイリに行つたのは事故があつた5年後です。ぼくは写真家ですが報道カメラマンではないものですから、すぐ駆けつけてすぐ撮るといふのが得意ではありません。写真家にもいろいろありまして、本当にサツと行つてサツと知らせることが得意な人もいますし、ぼくみたいにずるずると時間が経つてから行く人もいます。いろいろなかたちでみなさんに言いたい、見せたいという気持ちは誰にもあるわけで、そういう点では、事故が起こったときにはほくも非常に驚いて、やはり早く行つてみたいという気持ちはあつたのですが、なかなかすぐには行動に移せませんでした。

松本にあるNGOのお手伝いで行つたのが5年後の1991年の春のことでした。そのときは信州大医学部のお医者さん、小児科、第二外科、甲状腺科の先生たちと一緒にでした。最初に案内されたのはあの「石棺」と言われる、事故を起こした4号炉でした。150メートルくらいのところまですでにコンクリートで舗装されており、バスでそこまで案内されて、見学ができるようになっていました。案内の方は「安全ですからご安心ください」と言うのですが、「滞在は5分だけです」とも言われました。それもまあそうかなと思ひながらカメラバックを地面に置こうとしたら、今度はものすごい勢いで怒られました。ちょうど季節は初夏で、本当にとつてもどかで、「ああ本当に事故は終わったのだな」という気持ちにさせるような日和でした。そのときです。実は、お医者さんの一人が放射能の測定器を持ち込

んでいまして、スイッチを入れたらすごい音でピーピーピー鳴り出したのです。「数値はいくつだ」「600倍だ」とか言ってるね。一行は10数名いたのですけれども、みんな慌ててバスに逃げ込みました。後で考えてみたらバスに逃げ込んでも…と思いましたが、そのときは本当に怖かったですね。放射能というのは痛くもかゆくもない、とよく言われます。確かに何も感じないのだけれど、あの音だけがすごく怖かったですね。それからぼくは、嫌なところへ来てしまったなあと思っていました。でも、これはボランティアだから1回だけと思ったのです。

次に案内されたのは、隣の国のベラルーシという国でした。チェルノブイリというのはロシアとベラルーシとウクライナのちょうど国境のそばなのです。そのベラルーシのゴメリ州というところは、汚染された灰が落ち、6倍から7倍の高汚染度になってしまった場所です。ホットスポットですね。180キロも離れているのに、30キロ圏内よりも放射能の濃度が高いところがたくさんありました。ぼくたちはその州立病院の小児病棟を訪ねました。各病室にはその地域から集められた、甲状腺がんやいろいろな放射能による障害が起きた子どもたちがいたのです。抗がん剤でつらい子どもたちがベットに横たわっているわけで、それでもぼくが先生に案内されて入って行くと、一生懸命に起き上がって、ニコッと笑って歓迎してくれるのです。それがとてもつらいというか、自分たちのせいでこの子どもたちをこのようにしてしまったというか、つまり自分たちが豊かになろうとしたそのツケが、全部この子どもたちにいつてしまったということに対して本当にごめんなさいという気持ちで、そのときはほとんど写真も撮れずに帰ってきたのです。こういう子どもたちをぼくにはとても撮れない、だからもうここに来るのはやめようと思いました。

最後に案内されたのが、ゴメリ州の中のチエチェルクスという、後にぼくの2つの映画と写真集の舞台になっている地域です。かつては3万人ちよつとあった人口が、事故による汚染で強制移住の対象となった村々がたくさん出てきて、5年経った当時で1万9千人を割っていました。その村は信州大学の先生たちが10年単位で村の人たち、子どもたちと関わっていろいろということ、小さい病院に4、5日滞在するのですが、ぼくはそれについて行きました。最初、ぼくは写真を撮るよりも何か他のことを手伝おうと思って、白衣を借りて行ったのですが、何もできることがなくて。ところが、そうだ、この村だったら写真が撮れそうだなと思ったのです。というのは、4月でね、りんごの花が満開だったので。本当に真っ白いりんごが咲いていて、ちよつどじゃがいの植え付けの時期でしてね。汚染されている村もそうでない村も、都会から子どもたちが戻ってきて、農作業の手伝いをやっていたのです。福島でも言えるのですが、汚染というのはまんべんなく、ではないのですね。ホットスポットができていて、全くきれいなところもある。だから、すごく始末が悪いわけです。そのホットスポットだったのが後にぼくが映画を撮った『ナージャの村』でした。ここは強制移住地区でした。それからもうひとつの映画『アレクセイの泉』は、汚染の具合によって何段階かに定められています。引越さないという「勧告」がでていた地域でした。そこを馬車に乗せてもらったり、ヒッチハイクをしたりしながら、小さいかばんにカメラを1台入れてまわりました。本当に風景がいいのです。測定機を持っていればどこもピーピーピーピー鳴ったのでしようけれど、そういうものをぼくは持ち合わせていませんでした。ちよつどじゃがいの植え付けで村がにぎやかな時期であり、しかも日本人に初めて出会ったということ、みんなに家の中に招き入れられて、あつという間にごちそうが出て、地酒を出されてですね、言

葉もほとんどろくに通じないのになんだか盛り上がってしまふのです。それを10数軒くらい呼ばれて、それから宿舎に戻ると自分だけが酔っぱらっているのです。一方で、信州大学の先生たちは「今日は何10人診た」とか、「あの子はすぐに治療しなきゃダメだ」とか、深刻な話をしているわけです。先生たちがみんな本当に疲れているなかで、ぼくから「今日のごちそうは……」という話はどうしてもできませんでした。そして、もう二度とこの地域には来ないだろうと思っていたのに、結局3か月後にはまた行っていました。娘の結婚式だから写真を撮りに来てくれとかね、溶接棒がないから持って来てくれとか、心臓があまりよくないから薬を持ってきてくれとか、そのような注文をたくさんもらうのです。ぼくはなぜ通いたくなつたのかというと、ひと言で言うと、そこに「いのちが見えた」ということです。ともかくそれまでチェルノブイリの悲惨な状況についてはテレビや雑誌、新聞でたくさん紹介されていましたが、そこでぼくはいったいどういう写真が撮れるのだろうかと思っていました。行ってみたら、悲惨さというものよりもむしろ彼らの暮らしを撮れたらいいなと思ったのです。フランス人の友達がぼくの写真集を見て、これはフランスの100年前、いや200年前の風景だなと言ったくらい時代遅れというか、本当に素朴な暮らしをやっているのです。しかし、一つひとつを見るとちゃんと「いのち」と向き合っているのです。後に分かったことですが、本当に皮肉なことに、チェルノブイリの原発の6割から7割は輸出用だったのだそうです。東欧の輸出用のドル稼ぎの発電所だった。福島も東京に送る、東京に使うための原発ですよ。だから、どの家を訪ねて行っても本当に素朴で冷蔵庫はあるわけではなく、電気など少ししか使っていない。車もない。家電製品もない。でも、彼らは決して自分たちの暮らしは貧しいとは思っていない、そこがすごいのです。その後10数年通ったわけですから、その間にソビ

エト連邦が解体してベラルーシもロシアもどんどん経済発展をして、それと同時に若者たちが皆都会にどんどん出て行くし、どんどん物が入ってくる。5年後ともなると、どの家庭でも息子からのプレゼントだと言って外国製のテレビが並んでいたりするわけです。あつという間でした。でも、ともかくぼくがそこで見たのはこのようなまともな暮らしというか、このような暮らしがあつたのだということでした。それから、かれこれ40回近くは通つたと思います。

日本が敗戦したときぼくは5歳でした。戦後の貧しい暮らしと言いますか、シンプルな暮らしと言いますか、物がなかつた時代に育つた人間です。だから、余計に彼らの暮らしのなかに「何か見えた」という気持ちがあつたのだと思うのです。その後、ぼくたちの世代は1964年の東京オリンピックをピークに、どんどん物物の文化に代わっていったわけで、我が家もバラック建ての家がいつのまにかちよつといい家になったり、家電製品がどんどん増えていったりと、どんどん変わっていったわけです。新幹線が走り、高速道路が走り、ぼくが学校を卒業する頃には本当に高度成長のおかげで日本中が豊かになった時代でした。しかし、ひとつの物質の文化を得るために、何かもうひとつの豊かさを失つていたという、それがぼくの写真のテーマになっていると思います。

その後、ベラルーシへ38、39回通ううちに3冊の写真集と、2本の映画と、それから3冊の子どもの本によって、ぼくの言いたかったことを皆さんに見ていただけになるようになりました。映画を観ていらっしやらない方にもこんな風景のある場所だつたのだというのをご覧いただこうとスライドを用意してい

ますので、ちょっと見ましょよう。

〔以下スライド解説。写真は省略〕

● 「石棺」と言われる4号炉の事故があったところは、結局セメントと鉛と鉄とで上を覆うしかなかったわけですが、ここは沼地なのでこれ以上多く囲うと、どんどん沈んでいってしまうのです。いまだに核反応が全然消えていません。だから、いつ爆発するかも分かりませんし、隙間からまだたくさん放射能が出ているそうです。

● 4号炉を見学するときには専用の白衣と靴に履き替えなくてはなりませんでした。

● 30キロ圏内のゲートをくぐるとプリピャチという町があります。この町は原発のためにつくられた町なのです。ここで働く労働者は当時ソ連の労働者の給料の倍以上と、本当に優遇されていたそうです。観覧車があったり、ホテルやスパーマーケットがあったり、当時のソ連としてはびっくりするような町だったと思います。今ではもう誰もいません。

● ソ連の病院は完全看護ではなく付き添い制度です。ゴメリの病院では、子どもにおばあちゃんがついていて、入院してまだ1週間も経っていないと言っていました。髪の毛が全部抜けて、治療に入っている男の子もいました。ぼくはその後も何回か行ったのですが、このときに撮った写真の3割は渡せない

のです。渡せないというのは彼らが治って退院してしまったからではなくて、治らないで亡くなってしまった子どもたちがすごく多いからなのです。

●当時のソビエト連邦の医療は遅れていました。チェチェルスクの地区病院では、バスで村々から子どもたちが検診に通っていました。

●一方、汚染されていない村々では村の暮らしは変わらずに続いていました。花嫁も結婚式でずいぶん出会いました。出会うと必ず招待されるので、結婚式にはたくさん出てきました。しかし、結婚して赤ん坊が生まれてということを考えてとても大変です。この後、また5年後に行ったのですが、ちょうど当時の子どもたちが20歳すぎて結婚し、出産の時期を迎えるころでした。すると、ゴメリの産婦人科にやはり皆いろいろな心配事を抱えてやってくるのです。放射能のために流産するということも確かにありますが、半分は精神的な面ですよ。それぞれが自分のお母さんに「あのとき、わたしはどこで遊んでいたの？」と聞いて、実際に子どもを産むときになつてそういう心配事がどんどん出てきて、非常に出産率が低下するということを取材しました。身体のことばかりではなくて、やはり精神的なケアとどうかね。東北で被災されたお母さんたちも本当にいろいろな心配事をしています。そういうことをどうやってみんなでケアしていくか、ということがこれからたくさん出てくるのではないかと思います。いま東北で5歳、6歳の小さい子どもたちも15年後はお母さんになっていくわけで、そのときまでずっとその思いを引きずっていくわけですからね。

●当時、1993年頃に撮った自由市場の写真を見ますと、いちごやりんごなどが売られていましたが、なんらかのかたちで汚染はされていると思います。

●トマトの苗を買って置いて、家の中で苗床を作り、春になったら植えようと言っていました。自家製ウォッカ、サマゴンもありました。社会主義国家ですから、密造は禁止、勝手に作っては絶対にいけないはずなのです。最初はこういう大切な酒をほくにふるまってくれていいのだろうか、と思っていたのですけれども、よくよく聞いてみると本人たちがいちばん飲んでいるのです。つまり、「日本からのお客さん」ということが口実なんです。結婚式とかお葬式とかではサマゴン、自家製のウォッカをふるまっていたという暗黙のことがあるそうで、だからどこでも蓄えているわけです。

●後でお話ししようと思いますが、「かわいがって育てた豚はうまい」と言うのですよね。映画『ナージャの村』の中にも豚の屠殺が少し出てきます。だいたいは冬に屠殺するので、秋になるとどんぐり拾ってきてあげたり、麦をもちそうしたりして、豚は本当に幸せそうです。ブラッシングを何回もやって、おばあちゃんがほくにそっと「これだけかわいいがっているのだから、この肉はうまいよ」と魔法使いのお婆さんみたいなことを言います。でも、「かわいがっているからうまい」というのはなかなかいいなと思いませんか。

●たいがいペラルーシの人は、どういうわけだか80歳を過ぎるとおばあちゃんがどんどん立派になっ

て、おじいさんが皆かわいくなっていくのです。

●かつては皆コルホーズだったりソホーズだったりと集団で農場をやっていたのですが、これが解散してしまっていますから、もう畑は使い放題、何でもやっていましたね。

●あるおじいさんが植えた木があります。この村も全員移住してしまつたのですが、時々このおじいさんは村にやって来て、自分の植えた木を見に来ているのだと言っていました。

●原発の4号炉からちよつと入つた近くの村に、行政の指示を無視してずっとここに住み続けているおばあさんがいるのですが、ほくに見に来いと言うので家について行きましたら、家族の写真、孫の写真がいっぱい飾ってありました。

●アルカジイ・ナボーキンさんという、ほくが映画を撮るきっかけをつくってくれたじいさんがいます。ベトカという汚染地区のある村にたつた1人で住み続けていました。元高校の先生で、60歳を過ぎて年金生活になつたら戻つて農業するのだと言っていて、このときはもう82歳でした。事故が起こつて、みんな村から出ていってしまったのだけれども、そのじいさんだけが残っていました。ほくはじいさんの暮らしがとても気になつて、時々遊びに行つていたのです。ほくが「どうしてこの村から出ていけないの。もつと安全な場所があるでしょ」と言ったときに、このじいさんがきよんととして、「人間が汚し

た土地だろ、どこへ行けって言うのだい」と言ったのです。その言葉に、ああそうだよな、と。時間が経つと他人事のように思うけれど、結局は人間が汚してきたもの。それで引越さないというのは、このじいさんにとっては許せなかったのだからうと思います。今回3・11の事故があつてから、このナボークインさんの話を思い出しましたというお便りをたくさんいただきました。

●この村の中に入るときにはゲートがあります。これは国際的に決められていて、「STOP」という英語が使われているのだそうです。「危険だから立入禁止」という看板です。

●最後は村に帰ってくると年寄りたちは言うけれど、結局亡くなってからでないか帰ってこれない。ぼくがこの村に行くとき必ずお墓が増えているのです。強制移住で外に出てそこで亡くなって、亡くなるとうまく故郷の自分の村に戻ってくるということだったのですね。

●ぼくがよくお世話になったターニヤさんという保健局の方がいますが、彼女が『アレクセイの泉』の村を教えてくださいました。「本橋さん、毎月計っているのだけれど、ひとつも放射能が検出されないんだよ」と教えてくださいました。ターニヤさんがいつも毎月一度この村を計りに来るのですが、おじいさんおばあさんたちは、「計れば放射能が減るのか?」と言ってひやかすのですよ。もうずいぶん通つたのだから、ずいぶん減つただらうねと。

●きのこ採りもします。ここのきのこがとてもおいしいのです。ヨーロッパでも高いきのこです。やはりきのこは放射能を吸いやすいので全面禁止です。おじいちゃんに「体に悪いからやめよう」というアレクセイに、年寄りたちは「我慢することのほうがよっぽど体に悪い」と言う。アレクセイはしようがなく森へ採りに行きます。ほくなんかも考えてみると、もし松茸が籠いっばいにあつて、身体に良くないから食べないようにしなさいと言われても、松茸を前にじつと我慢するほうがよっぽど身体に良くないのではないかと思えます。

●アレクセイのお母さんの手は道具なのですよ、本当に。そのことをほくはいつのまにか忘れていたように思います。「春から秋にかけて私は爪を切ったことないよ」と彼女がよく言っていました。土をほじくったり、いろいろなものを握ったり持ったりしていて、やっぱり手は道具なのです。『イワンのばか』の中で、イワンの国でごちそうになるときには手を見せるという話がありましたよね。これは働いていないと思うと、ごちそうになれないという話なのですが、あれと同じですよ。ほくも手はわりとごついと思っていたのですが、この婆さんとダンスやったり手を握り合ったりなんかしていると、男のくせにお前の手はなんだと言われているようにだんだん恥ずかしくなってきました。本当に手は道具であり、彼らの暮らしの原点だと思います。じゃがいもを持っている優しい手と、掘っているたくましい手と。

●『アレクセイと泉』の映画に出てくる泉の洗い場の木枠づくりは、本当に斧一本で丸太を組み立てて

いきます。声ばかりで全然上がらないので、みんなだめだなと思っていたのですが、実は平均年齢が71歳だったのです。

●完成した泉の木枠です。実にきれいにできています。斧一本で作り上げていくというのはすごい技術です。

●泉が新しく洗い場になったところに神父さんが来てくれて、ここで礼拝をします。旧ソ連邦は宗教をどこか規制している部分もあって、ヨーロッパだったらどこでも村々に教会はあるはずなのですが、ベラルーシの場合はめったにありません。それで泉が教会代わりになっていました。神父さんが持つてきたのは、なんとチェルノブイリを描いたアイコンでした。

●その後、この広場で久しぶりのパーティが開かれました。かつてはこの村には600人が住んでいたそうです。それがこのときで55人。今では30人を割っているそうです。久しぶりの村のパーティでは、おばあさんたちがいちばん元気でした。本当にお酒をよく飲んで、いろいろな話をして。「何の話をしていたの？」と聞いたたら、ボーイフレンドの話のようで、おじいちゃんを放っておいて皆若き頃の話していたのだそうです。

●村とチェチェルスクの町に週に2回バスが通ってきました。さっきのおばあさんの家に飾られていた

孫の写真と同じように、どこでもやっぱり子どもたちや孫たちが村を出て行ってしまふ。かつては絶対にそんなことはありませんでした。それが皆別れ別れになって、写真だけをこうやって貼りつけていました。

●ペチカはすごく大きいのですよ、ご存じですか。2メートル×2メートルくらいで、それがどんと部屋の壁面にあります。暖房はこれだけです。薪を焼くと灰がたまってどんどん残っていくわけですから、この部屋の中でもっとも放射能が高いのです。先ほどお話ししたターニャさんが、ともかく灰をためないようにしなさいと口を酸っぱくしています。でも、その灰をどこに捨てればいいのかと聞かれると、ターニャさんもちゃんと答えられないと言っていました。それは今回の東北ばかりではなく除染の後始末と同じことで、放射能というのは煮ても焼いても本当にどうしようもないものだということです。

●ペチカでひと冬使う薪を確保するというのは大変なことです。薪が足りなくなると取りに行くのですが、村で若い人はもうアレクセイだけです。

●泉から水を汲んでくることもそうです。飲み水でもあり洗濯にも使う水を汲みに行かなくてはいけません。水汲みのバケツは両方で30キロ超えますから、汲んで来られなくなったときが村を出るときだと言われます。昔は嫁や息子が代わっていくことで暮らしが続けられてきましたが、いまは代わってくれる人がいないのです。そうすると、この水を汲みに行けなくなるということは、ここの村を出るとい

うことになるわけです。

〔スライド終わり〕

ぼくはこのようなところにずっと通い続けて、映画や写真を撮ってきました。しかし、こういう暮らしがいいというわけではありません。電気に代わるものは、太陽光とか、風力発電とか、そういうものを作っていくということは間違いいではないし、いいのだと思います。でも、ぼくが3・11のときにいちばん考えたのはそのことよりも、自分たちの暮らしをマイナス計算していくということでした。今の暮らしをちよつとでも減らしていくこと、です。例えば、新幹線で東京―大阪間をのぞみだと軽々3時間を割って行けますよね。これまでは3時間を割ることばかりを考えていたけれども、もう少しゆっくりにしてもいいのではないかと思うのです。3時間10分でもいいのではないかと。使用電力も減るし、危険性も減るのではないのでしょうか。そういうふうな計算をやっていくこと、そういうことをすることが肝心なことではないかと思っっているのです。このまま発展するわけではないのです。この間、地球の人口が70億を超えたとお祝いをしていましたけれども、そもそもお祝いするべきことなのでしょう。30年前は地球の人口は6億人だったそうです。30年の間に10倍に増えてしまったわけです。それはなぜかというと、ぼくは産業革命のせいではないかといいい加減に言っています。つまり、動力というものを人間が見つけ出した。それまで水は高いところから低いところに流れる、そういう大前提で皆暮らしをやってきましたわけです。食べ物自身が運べる範囲で、自分が取りに行ける範囲で暮らししてきたわけです。でも、動力ができたことによって水が低いところから高いところに流れるようになった。そうすると今ま

で人間の食べ物採れなかった、人間が住めなかったような場所が、動力を利用することによって人間が住めるようになってしまった。でも本来ならば、そこには他の命を持っているものがたくさん住んでいたわけですよ。そういうものを追い出したり、殺したりしながら人間だけが増えていった。距離も動力などによって短くなったから、あちらのものを持ってきて食べられるようになったり、こちらのものを売ることができたりして、そういうことであつたという間に人口が増えていったわけです。だからそれほど多くや皆さんもいるわけなのですが、もうそろそろそういうことも元に戻していかないといけないと思うのです。

『アレクセイと泉』のときにほくは水のとかがとても気になって、いろいろ読んだり聞いたりしました。アレクセイの村々でおいしいさんおばあさんたちが村から町に出て行かないいちばんの理由は、「いのちをお返しするときにこの村、この泉にお水を返せないから嫌だよ」と言うのです。借りている水が50キロの方だったら35リットル、つまりポリタンク2個分も持っているわけですよ。みんな借りていて、いのちがなくなったら返すわけです。後にNHKの番組で言っていました、生き物たちが借りられる水は地球全体の水の0.003%から0.006%しかないのだそうです。さすがにNHKでは「借りる」ではなく「使える」という言葉を使っていましたけれども。だから、西暦2085年以降になって、世界の人口が85億以上になったときには、その水が足りなくなってくるというふうに言っていました。70億ですからね、あと10億増えることは簡単なことです。そうしたらどうするのでしょうか。例えば、体重の多い方にはちよつと税金を高く取るとかね。それでも人口は間違ひなく増えていきます。そうしたら人

間はまた何か方法を考えるのでしようけれど、でもそれならば、いい増え方をしなければいけないと思う。太陽光パネルを全部山や野原や海の上に敷き詰めれば、原発を作らなくてもいいと言う方もたくさんいるようですが、でもあのパネルを敷いた下には他の生き物たちもたくさん生きています。そういうことを考えないと絶対だめだろうなと思います。人間の都合で、それが全部ゴミになったらまた大変なことです。そのようなことも含めて、マイナス計算なのかなと。ともかく、若い人たちはこれから大変だろうと思います。だって、ぼくたちがつくったものを全部君たちに任せるといってお願ひしますというわけです。年金もなくなるでしょう。でも、そのこと以上にゴミをたくさん残していくわけで、若い人たちは本当にもっと怒っていいのではないかと思えます。マイナス計算をやっても、気持ちプラスにといいふうに。

「ナージャ」とはナジェージダという女の子の名前なのです。通称ナージャなのですが、ロシア語で「希望」というのですよね。たまたま「ナージャ」の映画だったので。そういう夢を皆でちゃんと作り出していこうというふうに、今日は若い方がたくさん会場に来ていたので、ぜひぼくたちおじさんおばさんにできることがあったら、あと5年、10年は働けると思うので、できるだけのことと一緒にやっつけていけたらいいなと思っています。

〈ミニセッション〉

【小玉 亮子氏】

「子どもたちと未来」を再考する — 本橋さんのご講演をお聞きして —

本日は雨の中おいでくださいましてありがとうございます。小玉と申します。司会を務めております菊地先生と私は、「子ども社会学研究会」という会を行っております。社会学という名前はついているのですが、子どもが出てくる映画を観ようというプロジェクトです。そこで、3月か4月だったと思いますが『ナー ज्याの村』を上映させていただきました。そのときは学生さんなど30名くらいが来てくれてすごく盛況で、しかも、その『ナー ज्याの村』を観て、一同衝撃を受けたのでした。その後、菊地先生が本橋さんと知り合いになったと聞きつけた私は、それはもうお呼びするしかないということで今日のシンポジウムが成立したということでございます。まず言い出しっぺである私から、そして榎原先生にもご議論いただきます。

もう先ほどの写真とお話に圧倒されておりまして、この上何を言う必要があるのかなと思いますが、本橋さんの『ナー ज्याの村』を半年前に拝見しましてから、ずっと考えているようなことをまとめてお話しさせていただこうと思います。

みなさんはすでに読んで来てくださったかと思いますが、私と菊地先生とが意気投合した点というのが、本シンポジウムの趣旨の文章にまとめられております。

〔シンポジウム趣旨〕

第2回シンポジウムでは、チェルノブイリ原発事故によって放射能汚染にさらされた村に暮らす人々の生活を捉えたドキュメンタリー映画『ナー ज्याの村』の監督・本橋成一氏をお迎えします。

今回の震災で私たちは、あたりまえに続くと思いついてきた「日常」が失われ分断されうることを改めて知りました。その中で、幼い「いのち」をどのように生かしていけばよいのでしょうか。はるか先の時代まで持ち越し未来の子どもたちに背負わせることになってしまった目に見えないものに対し、私たちは自覚的に、今ここへのまなざしだけでなく世代性を含めて考えていかなければならないと思います。チェルノブイリの事故をどこか遠い国の、関係ない話だと勘違いできなくなつた今、3月11日以降の、子どもという存在や子どもを取り巻く社会の今後について本橋監督のお話から皆で一緒に考えていきましょう。

そのチェルノブイリについてですが、1991年の段階でもうすでに現地に入られていた本橋さんに比べ、私は本当に他人事だと思っていました。今年になるまでですね。これは菊地先生の言葉ですけれども、『日常』が失われ分断されうることを改めて知りました」ということを私たちは痛感したのです。その中で、次の段落の文章です。この後でまた本橋さんに時間があればお話したいだこうと思いますが、一つのキーワードが「いのち」ではないかなと感じております。こういう状況のなかで幼いいのちをどのように生かしていけばよいのでしょうか。はるか先の時代まで、もう少し未来の子どもたちに背負わせることになってしまった目に見えないものに対して、私たちは自覚的に今ここへの眼差しだけではなく、世代性を含めて考えていかなければならないと思います。このことを痛烈に意識して今日に至ったわけです。チェルノブイリ事故を、本当に遠い国の関係のない話と思っていた私ですが、それをもう少し真

ん中の段落で書かれているようなコンテキストの中から考えてみたいというふうに思つて、本シンポジウムの計画に着手したというところ です。

みなさんもご存じかと思うのですが、2011年10月31日の朝日新聞に記事と写真が載っていました。ナージャの村が消えたということは本橋さんの映画を観て勉強させていただいたわけですが、その記事によると、そのように消えた村は168あったと。村一つの規模を後でまた教えていただきたいと思いますが、私には日本語の「村」という概念でいいのかと考えつつ、いや、それでもこの数なのかと驚愕したのです。ここに書かれているロシア語が村の名前で、それが168並んでいるという、そういう写真を見ました。『ナージャの村』は、168の村の歴史の中で起こったことなのだというのを10月に私は改めて知ることができました。

この「消えた」ということも、非常に気にかかることです。消えてしまう村があるということと同時に、それは消えてしまう歴史になってしまうのかと思いました。実は私、歴史的な分析をすることを専門としておりますので、どうもそこが気になるのです。でも、本橋さんが映画で撮られたこと、写真で撮られたことは、消えてしまう村という人工的につくられたものがある一方で、消えない生活というものがあるのだということではないかと思つています。村という、そういう人為的な単位が消えていくことが歴史上起つてしまうにも関わらず、消えない生活、人々の生活があると同時に、消えない自然や消えない大地があるということを語っていらつしやるのが本橋さんの映画だったのだからと考えます。そしてそれは、消えてしまう歴史に対して、消してはいけない生きた人々というか、歴史というものが

他方である。それを私たちは残していく使命、使命というと変ですけども、残していく必要もあるのではないだろうかというふうに考えています。

歴史というのは人が語り、人がつくっていくことによって歴史となるわけですが、ストーリーでもあります。でも、ストーリーを語る人間がいなければ消えてしまうわけですから、それを消さないということが本橋さんの映画の非常に重要な点ではないかなというふうに考えました。人々が作り出した消えてしまうものと、あるいは消えないものと、それから消してはいけないものというなかに、私たちは生きていくのだろうというふうに考えます。

本橋さんのコメントの中に300年前の人口が6億だった、そして今70億になった話がありましたね。それともう一つ、私は水の話にびっくりしました。地球は水でできた星かなあと思っていたら、その中で使える水は実は少ししかないということ。地球全体の水の0.003%につながっているということの大きさと重さの中で私たちの歴史というものがあるということが改めて考えさせられたお話でした。

では、今までのお話を私なりに子ども論のほうにひきつけて少し考えてみたいと思います。私は教育学を歴史的に検討するというアプローチをしております。「発達 (development)」という言葉は教育学にとつてのキーワードです。しかしながら、「発達」という言葉は日本語ではいろいろな言い方がされています。「発達」とも言いますし、「発展」とも言われますし、「開発」とも言います。この「development」という言葉には日本語にするとこれだけの意味が含まれていて、私たちはそれを自由自在に操って、「子どもたちの発達のために」、「正しい発達のために」、「あるいは「社会の発展のために」、

そして「第三世界の開発のために」というふうには議論してきたように思います。そのこと自体を否定するものではありませんが、その中で忘れてきたものがあるのではないかと近代教育学批判が、教育学の一つの流れであったように思うのです。

人間中心主義、ヒューマニズムの観点ではあるのですが、いくつか私自身が考えている課題があります。先ほど本橋さんが「産業革命」ということをおっしゃったので、私もそこに乗ってしまおうと思つて話の舵をきることにします。実は、私も産業革命をどう捉えるか、どう考えるかということが子どもの問題を考える上で不可欠だと思っています。人間中心主義というヒューマニズムを私たちは否定するものではありません。しかし、そのことが持っているアンビバレントな側面というものを問い直そうという動きがあります。

エコロジーとか自然をふりかえるというものを考えようとするときに、私自身が教壇に立っていちばん学生さんに伝えやすい映画の一つがジブリの映画だというふうに思っています。『もののけ姫』のストーリーご存じない方は後でご覧ください。いつとはわからないのですが、鉄を鑄つて鉄砲を作り始めた時代が舞台らしいのです。もののけに呪われた身体のまま外をさまよっていた若者が神様に出会って助けてもらふ、そんなストーリーリーなのですが、その中でキーパーソンとして出てくるのが、すごく強い女性であるエボシ御前という人です。我々教育学、近代教育学を批判するスタンスの人間がよく考えるのは、ヒューマニズムと自然というものの両立の困難ということです。彼女は、リーダーとして、弱い人や外された人に愛を注いで、人間としての暮らしを保障し助けてあげる、売られた娘は全部買い取ってきてその集落で面倒見るといふ、そういう女性で、いわゆるヒューマニズムの人として描かれます。

このヒューマニズムの人であるエポシ御前がそのヒューマニズムの集落を守るために、あるいは発展させるために彼女は何をやるかという、鉄を鑄って石火矢を作って、いのししを撃ち殺して、自然を開発して、次から次に砂鉄を掘り起こして、ということをしませす。ここで出てくるのは一つのストーリーにすぎませんが、私たちは人間を大切にすることと、自然を破壊していく、自然をこれ以上開発していくことの両方を一度にやりながら近代社会をつくってきたというふうにも言うことができます。人間中心主義と産業というのが結びつくというのは、このあたりになります。産業をつくる、発展させるということは、人間の豊かさ、より幸福を目指す。産業革命によって人類は破格の力を手に入れる。それは鉄に象徴されるような、動力に象徴されるようなものではあると思うのですが、そのことによつてより進歩、より発展ということを目指してきました。18世紀はちやうど「啓蒙の時代」、あるいは「理性の時代」、「新しい科学の時代の契機の時代」と言われますけれども、その時代の中で発達、それから発展、開発というものが私たちにとつてのキーワードとなり、実は教育学はその中で生まれてきました。子どもたちをどう幸せに育てるか、子どもたちをどう大人にしていくのか、子どもたちの発達に即して、未来に向けてという、そういう中で教育学はできてきて、子どもをそういう目で見てきたと思います。それを支えたのが一つは「進歩」という観念であります。進歩していくということ、よりよくなっていくということを絶対の価値としておくのが近代の教育学ではないかと考えています。その中でできてきたのが、「子ども中心主義」です。子どもたちにとつての幸福は何か、よりよい子どもたちの生活を守るために、よりよい子どもたちの育ちを助けるためにというかたちで発展や進歩の中の子どもが位置づいてきます。子どもの価値というのは、将来に向けて伸びていくところで見ると

将来の伸びということでは子どもを考えます。それが近代の子ども観、私たちが持っている子どもに対する観念であったかと思えます。それと複雑に絡み合うのは、「子ども中心主義」です。見出し文の「今ここを越えて」という言葉こそが、実は私と菊地先生が共鳴したところなのです。

子ども中心主義というのは、実はちょっとアンビバレントな側面があつて、将来伸びていく子どもを大事にするという議論がある一方で、他方で将来のための子どもではなくて、今この瞬間を大事にすることが大事だという、二つの面が出てきます。私はその両方ともが違うということを今回のチエルノブイリの議論で言っているのではないかなと思うのです。将来伸びていく、発展していく社会のための子どもという考え方が違う、それに対する異議申し立てがあると同時に、今このときだけを見ていたのは子どもというものを考えることができないということも同時に言っている。今この瞬間を大切にすることをということは、一方で非常に今強調されます。でも、それだけを考えていたのではもう議論はできないところにきているということが、今回の震災でありチエルノブイリの話だつたと思うのですね。本橋さんの議論を踏まえて振り返ってみると、私たちが考えるのは、伸びている将来ある子どもという、そういう将来のために今を使つてしまうような子ども観だけでもなければ、今この瞬間を充実させるためだけの、そういう子ども観でもダメだろうということなのです。これまでを振りかえることも一つ今やらなくてはいけないことであり、今ここを共有することも私は否定するものではありません。しかし、これから30年後、50年後、100年後を展望するということとつながった中で議論することなくしては、今の子どものことは語れないだろうというふうに思います。今この子どもでもなく、未来のための子どもでもなく、過去から未来につながるこの長い歴史の中で、子どものことを考えていく、そういうきつ

かけになればいいなと思って今回のシンポジウムを企画させていただきました。そのことはこの後、本橋さんから補足していただきましたと思いますが、「いのち」というのがキーワードなのではないかなというふうに思っています。今生きている「いのち」というのは、その将来、それはたぶん、今の大人たちが死んだ後にもつながっていくような「いのち」であるということ、そしてそれはまた過去からつながってきているような「いのち」であるということ。時間軸というのを広く設定する中で議論するというこの大切さというものが、本橋さんの映画や写真集から見えてくるのではないかと思います。

子どもを考える視点をこれからどうやって私たちが議論していったらいいのか、ということを考えています。

〈ミニセッション〉

【榊原 洋一氏】

東日本大震災後の子育て環境について考える

みなさん、こんにちは。榎原です。本橋さんのお話と小玉先生から非常に哲学的と言いますか、どう
いう視点で見ていくのかというお話がありました。私は小児科医でもありますので、チェルノブイリ、
そして今回3・11の大震災と津波そして原発の事故による放射能という問題について、もうちょっと具
体的な問題というか現状の話を中心にさせていただきますこうと思います。

「子どもは未来である」ということについて言いますと、だいぶ前からキーワードになっていて、い
ろいろな考え方があるんですね。Children for Tomorrow、未来は君たちが支えるのだ、というのは
非常に聞こえいいのですが、私はたまたま小児科医の中でも神経の疾患で人工呼吸器をつけていたり、
脳性まひであったりというお子さんを診ています。そうすると、「子どもは未来である」という言葉に
仮定されている「子ども」は、「君たちは将来この世の中を支えていってくれる、そういう人だよ」と
いう意味で、「君たちは未来」です。しかし、私が診ていたのは、非常に辛辣な目で見ると、そういう
意味で未来を支えていくとは言えないようなお子さん、あるいはそこまで生きられない子どもたちなの
です。ですから、「子どもは未来である」というのは非常にきれいな言葉だけれども、その裏にある現
実というものをよく知っていました。小児科医には結構そういうことを知っている人もいます。今から
10年か20年くらい前にインドで国際小児科学会というのが開かれたのですが、そのときのスローガンが
まさにその言葉を表しています。それが Child Now Not for Tomorrow、なのです。現実には貧困と
か飢餓とかあるいは病気で、年間100万人以上の子どもが死んでいるこの事態をどうにかしていかない限
り、「子どもは未来だ」なんてことを言えないだろうというわけです。日本で年間100万人の子どもが生

まれますが、例えば、かつて世界では麻疹だけでそれくらいの子どもの数が死んでいた時代もあります。そのような問題をどう考えるのか。そして、そういう子どもを救おうと言って皆が頑張つて、小児科医が頑張つて予防注射をすると、今度は人口がどんどん増えてしまう。いずれにせよ、小玉先生にきれいに言っていたように、どちらかの視点だけではだめだということなのです。やつぱり考え直していかないといけないという、そういう機会を与えられたと思つています。

震災後の子育てをしている親たちへのアンケート報告からの抜粋です。話題提供というかたちでお話ししたいと思います。これは、被災地のお子さんたちではなくて、被災地以外の大都市とか、被災地からは遠いところの親御さんたち3千人に対して調査を行いました。ここに書いてありますが、0～5歳児をもつ母親、まさに子育て中の親たちに聞いたのは2011年5月27日、28日です。まだ一段落してない、大変なときです。インターネットによるものですから、調査はある程度バイアスがかかっていると思いますが、震災の前後で子育てに対する考え方や子どものいろいろな様子が変わったかどうかということをお聞きしたということです。

例えば、外遊びが減ったかどうかというを見てみましょう。そうすると、やはり震災後は外遊びが減っているんですね。これはもちろん被災地の子どもたちは今でも外遊びができない、あるいは時間が限られています。これは東京とか大阪とかそういうところでもみんな外遊びを控えているということなのです。外で遊ぶようにはなっているけれども、逆に屋内で遊ぶ時間が増えました、少しは戻っています。震災ということ。震災というのは、放射線のこと。現在も外に出る時間が限られていない

人の生活、そういうところの、特に子育て中の親と子どもの生活に大きな影響を与えているということが明らかになりました。どうして外遊びを減らしたかということについては、お察しの通り放射能への心配、健康への影響が心配だったからとことです。これにはいろいろな議論があります。福島は20キロ圏内の方についてはこれから見ていかないといいません。しかし、それ以外の地域、例えば私たちがのように東京などに住んでいる人については、現実のいま分かっている知識からすると今後がんが増えたりするようなこともないだろうという意見が強いのです。地震が心配だったから、という理由で子どもの生活が変わったのですね。

次に、5歳までの子どもの75%はあのわあーっと流される震災後の津波についての映像を見て、大きな影響が起きていることが分かっています。アメリカの9・11、テロリストアタックのときは、5%くらいの子どもがあの映像を見ただけで、夜眠れなくなったり、悪夢を見たりといった軽心的外傷後ストレス障害(PTSD)になっています。私たちの学会でも各メディアや厚生労働省に対して「そのような映像をたくさん流すのをやめてくれ、それが無理だったら『あまりお子さんには見せないで』というテロップをつけてほしい」と申し入れましたが、まったく無視されてしまいました。

ここから先、私が特に強調したいのは、2歳以下の子どもにストレスサインというものがあるかどうかということなのです。2か月後の5月の調査を見ると、震災後の3歳から5歳児にいわゆる「赤ちゃん返り」とまでは言いませんけれども、明らかに甘えたりするような行動が増えているのです。2歳以下の子には、例えば津波が来て……といった実際に起きていることのストーリーや意味合いは分からないと思うのです。しかし驚いたことに、そういう子どもでも3歳から5歳児と同様なストレスサインが増

えているのです。これはたぶん親の不安やストレスを見ている子どもがそうした行動を増やしていると考えられます。5歳くらいの子だと2か月くらい経つとだんだん日常生活に戻ってきて、心配ないのだということをも自分としても分かってくる、なんとなく理解するというところでストレスが減ってくるのですが、2歳の子だと減らないのです。これは、水や食べ物のこと、放射能の影響やホットスポットのことのために親がストレスの高い生活で不安を感じていることの影響ではないかなと思います。今回の震災が日本全体に大きな子育て上のストレスを増やしたことは明らかかなことです。現在でももちろん、たとえ東京にいる方でもさまざまな心配をされていると思います。

がんについて、私たち医者は今のままの推計で言うと、東京に住んでいる人たちの被ばくでは増えな
いだろうと考えています。例えば、今10歳の子どもが一生のうちでがんにかかる率は約30%と推計されています。それが現在の東京での被ばくの影響では、統計的に導き出したときに差として出るものに加はないと言われているのです。これは医学的、力学的なデータであるわけですが、それを聞いて安心できるかと言うとまったく別のことなのですよ。そうは言うけれども、うちの子はどうかということ
ろに課題がある。さらにはそのことだけではなくて、私たち自身の生活がすごく変わって、放射能のこ
とだけではなくて、電力や水の問題ということでも親がストレスを感じながら子育てをしており、その
ことが子どもの発達にどのように影響を与えるのかということが大きな課題として今あるのだと思いま
す。

本橋さんのお話にもありましたように、そのとき子どもだった人が今度は結婚して自分に子どもがで
きるときに、医学的な事実としてはたぶん平気だろうと言われても不安が増えるのは当たり前のこと

す。チェルノブイリではもちろん実際に被ばくや被ばくによる事故でたくさんの方が亡くなっています。しかし、それ以上に多かったのが自殺と人工中絶でした。人工中絶で失われた子どもがすごく多いのです。妊娠中に被爆した人は当然心配をしますから中絶してしまうというのが実際に起きていた事実なのです。

この5月の段階でまだ2歳以下の子どもの睡眠障害というのも結構多く出ています。放射能の心配が低い人と高い人とでいうと、子どもの将来についての不安も当然のことですが、放射能に対して心配だという人ほど将来についての不安も高い。これまた別のことで、家計への心配というのが多いという人ほど、子どものことでどうしたらいいか分からなくなることが多いのです。もともと子育てというのはストレスもある。しかし、そこにそれを積み増ししてストレスを増やすということが起こっている。子どもというのは、親だけではなく周りの大人から考え方であったり、大変な影響を受けたりするわけです。そういう非常に非常に社会が不安に思っている中で育っていく子どもたちというのは、たとえ身体的な悪影響がないまでも、その子どもたちが将来的に心理的にどのような大人になっていくかということがやはり課題があるのだろうということです。ですから、日本でまだデータは出ていませんが、この震災のために非常に軽度のものも含めてたくさんの子どものPTSDを経験していると思います。そういうことが子ども自身の発達にどう影響を与えるかということは大きな関心であります。

これは今言いましたように、母親の子育ての不安が増加すると、その間に相関関係があり、子どものストレスサインが出現するわけです。子どもにとって母親というのは環境の中でいちばん影響力が強い

わけですね。その母親が不安でいることが子どものストレスになるということです。これは、放射線の直接の障害に比べると少ないことのように見えますけれども、非常に数が多いのですね。日本中の直接関係のない地域の親がある程度の影響を受けている。そのことが今後子どもたちの発達にどう影響を与えるかについては、やはりきっちり見ていかないとはいけません。

外で遊べない、外で遊ぶ時間が減ったことで遊びに変化が出てくるということについてもそうです。ホットスポットと言われるところにはなるべく近づけないようにされている方も多いと思うのですね。しかし、今までと違ってしまったことで子ども自身もよりストレスを感じているのです。親のいろいろな不安と子どもの遊びという変化であれ相関があるということがデータに出ています。

この調査から、被災地以外でも、子育て中の親と子どものストレスが増加したことは明らかです。そして、それがまだ持続しているということです。それから親のストレスが子どものストレスに影響しているということ、これは大事なことだと思います。子どものことを思ったときにどうするか、それから後が非常に難しいのです。いま危険でストレスを感じている、そのことはもう変えることができませぬ。しかし、親としてそれを子どもに強く出すということが子どもにとってどういう影響を与えるかということを考えないといけない。すると、親は板ばさみになるわけです。先ほど言いましたが、年少児のほうは、年長児よりストレスからの解放が遅いのですね。状況が分からないからいいのかなと思うのですが、逆で、2歳以下の子どもは親からの間接的な影響を、そのストレスの写し鏡のように強く受けるということがはつきり分かっています。5歳の子どもならば幼稚園に行き、だんだん停電もなくなり、

物が増えてきたということで子ども自身の中である程度生活が戻ってきたなという実感があると思うのですが、2歳以下の子どもは親の影響そのものを引き受けているのではないかなと思います。放射線の影響については先ほど言いましたけれども、過大な危惧も、過小な評価も避けるべきで、事実を冷静に捉えることが重要と言えるでしょう。危険を実際よりも過大に言うことは、私たち自身のストレスを増やすと同時に子どもにも影響を与えます。だからといって、まったく問題がないとネグレクトすることもいけないのです。先ほど小玉先生が、これからの見方としては子どもは未来であるということと、今ここにある子どもという両方を見据えた、ある意味中腰の視点の必要についてお話していました。今、例えばこういうことについても、私たちがとるべき姿勢というのはまさにこの両方ですね。ですから、この中間の非常に難しい地点に立たないといけないわけです。

直接本橋さんのお話に対するコメントではありませんでしたが、それに関連して小児科医という立場から少し追加させていただきました。

【質疑応答】

菊地 では、本橋さんに先ほどのお話の補足や、その後のコメントを受けてのご感想をうかがいたいと思います。

本橋 向こうでおじいさんおばあさんたちに会って、いろいろな話をしていくうちに、ずっと思っていることが一つだけあるのです。それを『ナージャの村』のパンフレットに書いておりますので、読ませていただきます。

悲しみの大地、と人は呼ぶが、

ここで暮らしている人々のことは知らない。

放射能のたべもの、放射能の家、放射能の大地、

そして放射能のふるさと。

問題は放射能ではなく、いのちのことなのに。

いのちとつながっている、ふるさとのことなのに。

そんなことは誰も云わない。

ただ危険だから逃げろ、と云う。

いまだに花も咲くし、穀物だって収穫できる。

空はひろがり、鳥たちが舞う。

何もかわらない、わたしのふるさとだ。

悲しみの大地、と人は呼ぶが、

この大地にいのちを全うしたい、という気持ち

誰も知らない。

チエルノブイリ、ベラルーシ、ドゥヂチ村。

ここが、わたしのふるさとなのに……。

実は、このことがお二人の先生のお話を聞きながら、ぐるぐると頭の中を回っておりまして。まさに、いま東北では全部が放射能の値で括られています。しかし、そこに住むお母さんたちお父さんたちに対して「放射能の値ではないのだよ」ということがなかなか通じていないのです。

昔々のことでもないのですが、ぼくはかなりまともに子育てをやっていました。とてもおもしろかったです。そこでいちばん思ったのは、やはり子どもとお母さんの関係というのは、ぼくと妻との関係にすごく関連性があるということでした。子育て中のお母さんがいちばん大切なときは、なるべく自分を抑えるということではなく、とにかく正直にお母さんと向き合おうと、お母さんと子どもとの関係も良くなって、子どももぼくに非常に懐くというふうに感じたのです。

すべてを放射能で括っていくと、本当にどんどんストレスが溜まっていくのではないかと思えます。ぼくたちがこの世の中に出てきたことは偶然としか言いようがないわけです。だって、ぼくが生まれる

には父さんと母さんがいて、その父さんが生まれるにも父さんと母さんがいて、どこでどう間違えたのかは知らないけれど、とにかく何代か後に私が出てきたのです。ぼくがこの世にうまれてきたことも、父さんの精子と母さんの卵子がくつつくことも、すごい確率であり、奇跡です。そういうふうな奇跡的にいのちを授かって世の中に生まれてきたからには、限らねたいのちを楽しく、良かったなというふうに生きたいと思うのです。自ら「もう嫌だ」と言わずに、「ああ良かったな」と思えるような生き方をみんなができるといいなと思うわけです。今回の東北でもチェルノブイリでも、たくさんの余計なじゃまものを、たくさんの人たちに背負わせてしまったわけですから、とにかく「いのちのこと」をこうしてみんなで考えていくことが大切だなと思ったのです。

菊地 ありがとうございます。私自身もお父さんお母さんと子どもという関係とはまた違いますが、保育において小さな人たちの隣にいる人たちがどんなことができるのか、ということが非常に気になっていました。生来の人間的なのんきさのようなものが発揮できないということがものすごくつらいだろうなど。先ほど榎原先生のお話にもありましたが、親の心配、大人の心配が本当に子どもにとってストレスだということを目の当たりにすると、『ナージャの村』の中に出てくる、大人たちの、人間の、どこかのんきな姿に安心感を覚えたりするのです。

本橋さんが出されたいちばん新しい本が、この『屠場』という白黒の写真集ですが、こちらについてもお話しただけですか。

本橋 ぼくが育った時代というのは、まさに戦後間もないころです。ぼくは東中野にずっと住んでいて、焼け跡で育ちました。うちの親父はたまたま戦争に連れて行かれなかったものですから、親子3人、焼け跡にいました。親父はまず鶏を飼い出しました。ぼくが毎朝学校に行く前と帰ってきてからエサをやっていました。雌鶏には小学校の同級生の女の子の名前を、雄鶏には怖い先生のような名前を一羽一羽につけていました。卵は我が家の貴重なタンパク源だったのです。昭和25年には23%の日本の家庭で卵を食べていたという統計が出ていたのを読んだことがあります。東京の中野でも朝にはコケッココという声があちこちで聞こえていましたから、我が家で鶏を飼っていたのもそんなに珍しいことでもなかったと思います。それで、卵を産まなくなった鶏を月に1羽か2羽つぶすのですが、親父はぼくの学校の帰りを待って、必ず立ち合わせたのです。ぼくがエサをやっていますから「何子ちゃんがそろそろかな」とだいたい分かるのですよ。そうすると案の定「何子ちゃんだ」と言いながら親父がつぶすのですが、そのときは「ああ」と思うのだけれど、それが肉になったときにはもう何子ちゃんのことなど全然頭にない、肉のことしか頭にないわけです。その夜は必ずおふくろが手羽先を焼いてくれて、それがすごく楽しみでした。でも、ちよつと肉がついたまま戻すと、親父が「ほら、成一が可愛がっていた何子ちゃんだろ、しつかり食べなさい」と言う。ぼくたちの時代はそういう「いのち」が見えていた時代なのです。

ぼくは屠場（とば）、関東では屠場（とじょう）と言いますが、たまたま大阪の松原の屠場に10年以上通って、ようやく写真集になりました。例えば、ぼくの写真を見せて「牛はやはり殺されるといことが分かるのでしょね。嫌がっていますからね。」と言うと、屠場の人たちは皆「それは分からない

よ。変なところに連れて行かれる嫌さはあっても、それは自分が殺されるということは全然わかっていないよ。」と言うのです。それはほくも確かだと思います。人間の世界で見る「死」というものを当てはめて、解釈するようになってしまったこと自体が、もうすでに「いのち」が見えなくなってしまうているように思ふのです。よく犬に着物を着せたり、シャンプーで毎日洗ったりすることが可愛がることだと言われますが、それはいのちあるものとの付き合いではなくて、それこそ人形との付き合いになってくるのですよ。この中の牛が「いのちあるもの」ですが、ほくたちの大事なタンパク源になるのだということですよ。

菊地 本橋さん、どうもありがとうございます。では、会場から質問等ございましたらお願いします。

会場からの質問 1 本日は貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。ちょっと抽象的な質問になってしまおうのですが、お話を聞いている中で、価値観ですとか、いのちですとか、正義ということを考えてみました。私もまさに子育てをしている最中です。子育てというのは、子どもにこれはいけないよ、これはいいよと日々接していく中で、子どもが人として育っていく上で大事な価値観、人として失ってもらいたくないことを伝えていくのかなというふうに思います。正義とはそういう価値観を守っていく行いであるとするならば、例えば正義のための闘いが起こったりですとか、コミュニティやそういった広い社会に入ったときに少し違う考えの方がいらしたりするなと思いました。また、今は時間軸も地域差も越えて価値観が伝播していつて、ツイッターで人が集まってデモをしたりという

こともある時代ですし、そういったユニバーサルな意味になってしまいう正義というものも、もとを正せば本当にひとつのいのちが生まれて育っていく過程で形成されていくものであって、そのあたりの関係性をすごく考えます。先生方から何かお話しただけでしたら幸いです。お願いいたします。

本橋 ほくはあまりお答えできないと思いますが、ただ昔「世界はひとつ、人類はみな兄弟」と言ったおじさんがいましたよね。ほくもまだ仕事をやっていないときでしたから、うまいこと言うなあと思っただのですよ。「そうだよな、みんなでこう肩を組んでやれば世の中平和になるのだろうな」と思いました。でも、海外に行く機会が増えてからは、「もう宗教は違う、風土は違う。みんな違う中で、オイおまえ、兄弟だよなというのは嘘っぱち」と分かりました。つまり、相手の価値観というか、相手を認めることなのです。オレはピーマンが嫌いだけれど、おまえがピーマンを好きなことは理解するよという、そういうことだと思のです。正義というのはほくにはよく分かりませんが、それはもう子ども同士でも恋人同士でも夫婦でもそうだと思うのですよ。生まれも育ちもみんな違うわけですからね。だから、一緒の価値観で、正義感でまとめるというのは大きな間違いで、オレはこう思っていて、おまえがこう思っているのは気に食わないが、おまえがそう思っていることは認める、と。恋人、夫婦は特にそれの塊でしょう。言い合っていたらどうしようもないですから。子どももまさにそうですよ。世の中には小さいのがいて、大きいのがいて、太っているのがいて、のつぽがいて、いろいろな人がいて、ぼくらが子どものころには町の中にそういう人がたくさんいました。それがどんどんなくなってきた。みんなコカ・コーラのボトルのように同じであることが価値観というのは大間違いでね。やはり変な人はみ

んな変な人、まともな人はみんなまともな人、相手は相手の事情があるというふうだね。坂田明さんというミジンコを飼っているおじさんがいて、彼がよく言うのですが、ミジンコには愛が通じない、と。本当ですよ。だから、先ほど話した人間の愛情とか、それと同じことを子どもたちに押し付けているような気がします。

小玉 本橋さんが記事を連載されていた信濃毎日新聞の2004年7月5日付で「世界はたくさん、人類は他人」、私は個人的にすごくいいなと思いました。今おっしゃられたとおりだと思うのですよね。そこに書かれていた、「世界はたくさん、人類は他人」、「発達とか発展とか開発という価値観を、ひとつのユニバーサルな価値観として認めることを疑うということ」が今回私が本橋さんの映画の中から学んだことかなと思います。

榎原 医者には、病気を治してあげたらいいだろう、苦痛をとってあげたらいいだろう、それを仕事とする気合いと言いますか、それ以上をあまり考えません。病院にいますと「病気で」と患者さんが来ますよね、医者は「分かりました」とそこではじめて引き受ければいいので、意外と単純だと思います。

しかし、実際にはそうでもありません。正義とはちよつと関係のないことですが、私自身は難病の子どもをたくさん見ていますが、その中で、皮膚の病気で呼吸ができなくなり、2、3歳くらいで呼吸が止まってしまふという病気があります。ところが、この病気でも人工呼吸器をつけるとずっと長生きできるのです。こういう子どもたちに人工呼吸器をつけるかつけないかということはずっと昔から議論さ

れています。私が受け持った子は1歳で人工呼吸器をつけて、おそらくもう30歳になっています。外国では、その病気には人工呼吸器をつけません。だから、そういう話をするたびにヨーロッパの辺りでは「そういうものをつけるのは残酷である」と言われます。そういう子どもは生きていても「few time life（不毛の人生）」だと言うのですよ。つまり、日本とヨーロッパでは医の倫理で正しいと思うことについても違うのだと私は実感しています。ひとつで括るということ自体がやはり難しいのかなと感じます。

すべてのことの「これが正義だ」というのは、疑ってかかったほうがいいなというのは、私自身も思っています。特に、世界において今のこの文明というのはヨーロッパが主導してきていますね。そうかなあと思う反面、ひとつでなくてもいいのではないかな、という気もします。幸福は人の数だけあるけれど、個々の不幸な家族をそれぞれの場所で良くしていくことなのかな、と。つまり、あるひとつのストーリーで「生」を言うよりは、目の前にある「これは不幸だな」というものを、医者で例えれば治療するとか、そのようなことをみんながやっていくということ、それを許すということになるのかな、か。

小玉 今のお話は、トルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭で、「幸福な家族は一樣に幸福であるが、不幸な家族はさまざまに不幸である」という有名な一文があつて、たぶんそれと近いのかなと思います。

会場からの質問2 貴重な会に参加させていただき、ありがとうございました。「今、子どもが育つ環境を考える」というのは本当にびびったりなテーマで、しかもここにいらっしやるのは皆さん非常に若い

方々、未来を作られる方々で、非常にいい機会だと思いました。

いくつか印象的な言葉がありましたので、その言葉について触れたいと思います。

「若い人は大変だな」という本橋さんの言葉が、ひとつすごく印象に残りました。最近私自身も思うのですが、子ども世代、私たちの子ども世代、いま会場にいらっしやる20、30代の方々が非常にリスクを負ってしまっているという現状をみなさんどう考えていらっしやるのかなと、すごく心配になることがあります。その中で、先ほどストレスのお話もありましたし、先々にすごく不安に思われる方も増えているのではないかな、そういう環境にあるのではないかなと思います。

「希望」という言葉も印象に残りました。

先ほどの屠場のお話もそうですが、いのちには限りがあるということとは昔からずっと変わらないことなのですよね。やはり今日の話の中にもありました、未来は大変かもしれないけれども、それは昔から変わらないことなのではないかなというふうな印象を持ちました。本橋さんはこれからの時代、引き算が大事なのではないかなということをおっしゃいましたが、そのことと、ナー ज्या 中の希望、つまりこれから大変な世の中で、それは変わらず大変だということのなかで、引き算が大事かもしれないということ、それがどうしたら希望に繋がるのだろうかというところを私は学びたいなと思いました。私の卑近の例ですが、引き算ということと言えますと、3月11日の夜ですね、その日は仕事で家まで帰れなかつたのですが、次の日家に帰ってみますと、まさに引き算の生活だったのです。ものすごく暗い、ろうそくの明かりの中に普段あまり一緒にいることのない家族がそこにいました。そこでは語りませんが、これまでにないような得難い時間が過ぎました。希望という言葉を使っているか分かりませんが、

引き算の中に、何かこれまでとは違うものが生まれる可能性というものを私自身が感じた気がします。

この会は「子ども」という言葉がもうひとつキーワードだろうと思います。引き算と希望、子どもというのをどのようにつなげて考えていったらいいのかなということをお聞きしたいなと思いました。

本橋 例えば、昔は停電というものはしょっちゅうでした。でも、今は停電すると、エレベーターから何から全部が動かなくなるわけですから40数階建てのビルはどうするのということになる。今の若い人にとって、あたたかい、居心地のいいところから外に出ていくというのは大変な作業なのです。私たちの時代だったらしいいろいろなことを経験しているから出ていかれるのではないかなという気がします。だから、今のうちから引き算をやっておいて、そういうことが当たり前になっても大丈夫だよというふうにしていったらいいなと思います。かつて、ぼくが大阪に行くときには東京から6時間ちよつとかかりました。ぼくはまだそれが当たり前だというふうに思っています。若い人は絶対にそう思わないかもしれませんね。そんなに時間がかかったらすごく怒ると思う。そういうことを、ぜひ元に戻すというか、マイナス計算でやっていけたらいいと思います。もうすべてが経済、経済、経済という、経済の括りになってしまっていますから。大きい田んぼなど作る必要はないのですよ。小さい田んぼでいいのですよ。そういうことに騙されないように、どんどん引き算をやっていたらいいなと思います。そして「希望」ですね。「今日はお肉を食べられたけれど、明日は食べられない」ということではなくて、「明日も食べられるかもしれない」とどこかで思えるように。誰かにごちそうになっちゃったりすることもあるわけですからね。

菊地 みなさん、今日はたぶん何を召し上がっても、スーパーで買ったお肉でも、ああこのいのちに、このいのちをいただいて生かされているのだなあ、ということを感じると思います。そして、私たち人類は突然宇宙に舞い込んでしまったのではなくて、やはりずっと他の生き物たちと一緒に、あるいは同様に何らかのつながりの中で生まれて、そして今も生きていて、大きい人小さい人、未来がある人もう少しの人、いろいろな人がいる中でここに集まったのかなと、どこかで思うのではないかと思います。

フロアからの質問3 本日は貴重なお話をありがとうございました。現在、FOCELL社会人プログラムで乳幼児教育を学んでいる者です。震災以降、いろいろなものに関心を持つようになり、人生観が少し変わったように思います。いろいろなシンポジウムやセッションに参加しますと、教育もそうですし、地球のことですとか、人間のことですとか、やはり結論はすべてのいのちの方向で話されています。放射能のシンポジウムに行っても、すべてのいのちのことに話が集約する。最後はいのちのことについてまとめて結論になるのですが、いのちについての質問をお三方にしたいのです。

個人的な話になりますが、私自身は東京の住宅地でまったくあのような環境とは違うところで育ちましたが、母方の実家が農家であり、家畜を飼っていて、小さいころから目の前で見て育っていますので、震災のときに、食事をするときに小さい頃の記憶がぱつとフラッシュバックして、いのちのありがたみを感じた瞬間が何度ありました。それと同時に10代や20代の頃に、身近な親友や恩師が突然亡くなったりしており、いのちあるものが突然亡くなることの悲しみと、同時にいのちあるものをいただいて自分が生きていることのありがたみ、そしていのちとは何だろうということ、震災のときに自分のま

だ短い人生ながら経験の中からいろいろと考え、答えを出している段階なのです。

私は鶏を触る現場をずっと見て育っていたのですが、誰もがそういう屠場の、そういった経験をできるものではないと思いますし、身近な人が亡くなるということも経験できなかったことだったと思います。そこで、それぞれのお立場の中で、現代の、そしてこれからの子どもたちに対してのちというものの大切さを伝えるために、どのような教育や保育や見守り方が必要なかということを質問したいと思います。

小玉 ひとつ今日のお話と関連させて言いますと、自分から始まっているのちを捉えるというのちの学習があると思います。自分から始める、身の回りから始めるというのはある意味で教育学の中で分かりやすく、子どもはやはり自分の周りから始めるのだという議論を一方ですが、他方でおかしいという議論もあります。まず宇宙から始めていのちの話にいくという、だんだんだん小さくなっていくという話をしたらどうかという議論です。子どもたちへのちをどう教えるかではないですが、とりあえず今日の本橋さんのお話で言いますと、0.003%の水ということで議論を組み立てていたら、自分の周りに水があつて自分のまわりに生活があるということから始めるよりも、地球には0.003%の水しか使えないということから、そこにかかっているいのちというふうに議論をしてもいいのではないかなと思つてお話を聞いていました。

榊原 私自身はまだ死というのは分からないです。死の教育、子どもにどう伝えるかということについ

ては研究している方もいますし、もちろん宗教と関連づけてやっている方もいます。私は小児科医ですから引き寄せて言いますと、白血病やがんの子どもにどういうふうに死の可能性を伝えるかという事は、けっこういろいろなところでやっています。今でも国立小児病院、現在の成育医療センターでは死を伝えていきます。しかし、私がずっといました東大病院の小児科ではいっさいそれは言わなかったのです。どうしてできないかという、それは私が引き受けられないからです。

死の可能性や死について伝えるとき、まずほとんどの親が反対します。子どもには絶対に言ってくれない、と。伝えられた子どもは聞くわけです。「私、死ぬの？」と。それに対して答えられないのですね。現実に中学生の子が亡くなったのですが、私はそのときに病棟医長をしていました。その子があと1ヶ月くらいで亡くなるというときに、私は院内学級に行きました。院内学級の先生に、医者が伝えてもいいですよ、ただ伝え方は別としても、いずれ死ぬかもしれないということをお本人に伝えた場合、当然、院内学級の先生たちにも「私、死ぬの？ 本当？」と尋ねるでしょう。そのときに先生たちは引き受けますか、と言いましたら、先生たちは言わなくていいと言いました。引つ込んでしまいました。

日本人の死生観というのはたぶん違うのだと思います。ですから、子どもの死の教育というのはいろいろなレベルがあると思います。動物の死と自分の死というのは違うので、それを教えるべきだということでもいろいろな研究があります。ただ、もっとプラクティカルなことから言うと、子どもに死の教育が十分できていない状態があるのかというと、おそらくそうですけれども、私はそのことで何か非常に不都合が生じるのかなというほうから入ってしまうのです。子どもが死について確かに隔離されており、自分の前で動物が殺されて食べる経験もない。虫もいなくなつたから虫を殺すこともないし、死ぬ

ときも家族の人の目の前で息を引き取るということもありません。ほとんど病院の集中治療室でチューブにつながれながら、その場所にいなくて、亡くなりましたと聞いて行くということで、私たちの今の文明は非常に死というものを遠ざけたものになってしまっています。それが何かのカタストロフィとどうか、何か問題になるのでしょうか。食育でもそうかもしれませんが、この動物が死んだものを食べているのだよ、というふうに子どもに「死」を見せたほうがいいとよく言われています。『屠場』にありましたようにね。本橋さんもおっしゃっていた「今日は何子ちゃんだね」という経験。それがいま必要ない、そういうのがない状態の中で、あえてそれを子どもにやる必要があるのかなと、そこから議論したいなと思いました。知らない子どもが人間として何か問題なのでしょうか。例えば、ゲームなどはすぐにリセットできるから、人や動物も同じようにどんどんリセットできると思うようになってしまおうと言われていても、そんなことはたぶん起きていないでしょう。私たちは特別そういうことをしなくても、どこかでそういうことを身につけていくようなところがあるのではないかなと思います。お答えになっていませんが、必ずしもそういうことをしなくてはいけなしかどうかということが私には分からない、そういう告白です。

本橋 回答ではないのですが、いま先生がおっしゃった「死」というのは本当にベールに包まれていますよね。昔は「家」ですから、じいちゃんがそろそろ危ないとなると家の中がざわざわしてきて、そういう雰囲気みたいなものを子どもは皆味わった経験がありました。でも、死の前にはよくはやはり誕生というものをぜひ見てほしいのです。というのは、ぼくは長女も次女も生まれたときに病院で立ち会う

ことができました。ぼくは何でもなく立ち会えるだろうなと思つていたのですが、すごく動揺しました。つまり、動物なのです。ぼくの家でも犬や猫を飼つていたのでお産などもたくさん見ていますし、学校でも豚を飼つていましたから、豚の出産も見ていました。それと同じことなのです。それはあたりまえなのです。そのときにね、連れ合いもいろいろなことを言つたけれど、つまり生き物なのだと思います。男には分からない感覚というか、あのように平気でいのちをポロツと産む、そのすごさにショックでした。それ以来、女性に対して、すごい人たちだなと思うようになりました。つまりは、本当にそういうものすら隠しているわけです。結婚なさつて妊娠して、いよいよ出産が近づくと実家に帰つて産むという人が多いですよ。旦那は東京で働いて、帰つてくるときはお人形さんを抱いてくるみたいな。すごいことをして産まれたということは男には全然分かりません。それを子どもに見せるわけにはいかないかもしれないけれど、ぼくは見たことによつて人間の死をけつこう理解できたように感じました。だから、ぜひ出産するときには、できたら旦那を連れて、別にその場所において立ち会わなくてもいいから、そばにいてその雰囲気だけでも旦那に経験させなさいと、ぼくはよく言うのです。そうすれば、もつとあなたのことをちゃんと理解できるのではないかと、偉そうなことを言つたりして。可能性のある若い女性たちは、ぜひ何らかのかたちで立ち会わせて、まずはお父さんに死というのを勉強させるべきではないかと思つています。

菊地　ありがとうございます。

私は本橋さんのお話の中で、手についてのところが興味深かったです。手仕事ですね。人間はあのこ

つごつの、あの手で、ものすごく細かい織物をしているというお話を聞いたりすると、本当にしみじみとしてしまいますね。

やはり人が人を人にしていくと言いますか、人の中で人になっていくというときに、手のあの感じ、こっちで赤ん坊を抱いていて、こっちでいもを持っていて、掘っていて、とかね。またそのような切り口でもいろいろ人が育つということを考え合っていきなすと思いました。

今日は本当にもっといろいろなのが、それこそ掘り起こせたりするような可能性のある会だったと思います。それぞれの先生たちにいろいろお話を伺えたように思います。

本橋 いま、掘ることが出てきましたが、ぼくたちも撮影しに行ったとき、暇なときにはじゃがいも掘りを手伝ったのですが、最初は軍手を用意していませんでした。孫たちが手伝いに来て、みんな手袋をするのですよ。そしたら、おばちゃんが「あれは嫌だね、あんなので掘ったらね、石かじゃがいもかも分らないし、ミミズも分らないね」とぼくたちにそう言うのです。ぼくたちも出しかけた手袋をひっこめて素手で掘りました。そしたら、けっこう気持ちいいのですよ。だから、ぼくの手や皆の手の中にも手の感覚は絶対持っているわけです。よく裸足で砂の上を歩くと猿になったような気持ちになるでしょう。今日は先生たちが何人かいらっしやるようですからお願いします、テレビで「いも掘りが始まりました」という映像を見ると、真新しい手袋をつけて掘っているのですよね。あれがすごく気になっています。いも掘りのときくらいはぜひ素手で子どもたちに掘らしてあげたらいいなと思います。

菊地 手にまつわるお話はいろいろあると思いますが、本日はこれでおしまいにいたします。どうもありがとうございました。

〔記録・兎玉 理紗・榭原 友里〕

第2回

「乳幼児教育と連携した生涯学習モデルの構築」(ECCELL)

2011年11月19日(土) 13:30~17:00

今、子どもが育つ環境を考える I

～『ナージャの村』本橋監督をお迎えして～

講 演: 本橋成一氏(写真家・映画監督)
ミニセッション: 榎原洋一氏(本学教授・小児科学)
小玉亮子氏(本学准教授・教育学)
司会: 菊地知子氏(本学講師)

お茶の水女子大学 ECCELL 子ども学シンポジウム

第3回

講 演1: 村山祐一氏(帝京大学教授)
講 演2: 渡辺英則氏(ゆうゆうのもり幼稚園園長)

今、子どもが育つ環境を考える II

～現代の保育制度変革の中で起こっていること～

2011年12月18日(日) 13:30~16:30

詳細はこちら 

お茶大 ECCELL

検索 

nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

お茶大子ども学ブックレット Vol.2

2013年3月15日 初版発行

発行 国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯
学習モデルの構築」(**ECCELL**)

浜口 順子

編集 菊地 知子・寄藤 陽子

連絡先 〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学本館 335 室

TEL&FAX 03-5978-5663

E-mail nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

URL <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/>

印刷 光写真印刷株式会社